



## 年間15名の執行がもたらすもの 年末の死刑執行

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

東京都荒川区南千住1-59-6-302

<http://sobanokai.my.coccan.jp/>

昨年（2018）は、オウム真理教関連事件の死刑囚13名への執行があった上に、12月27日にも大阪拘置所で2名の死刑執行がありました。執行された岡本（旧姓河村）啓三さん、末森博也さんはコスモ・リサーチ事件と呼ばれる事件の共犯者で、岡本さんは再審請求中でした。山下貴司法務大臣が就任して約3カ月での初執行です。

★

年間15名もの執行数は、日本では2008年以來の大量執行になります。その2008年には「ベルトコンベアー式に執行すればどうか」と発言し「死に神」と呼ばれた鳩山邦夫法相（当時）が隔月で死刑を執行したり、冤罪<sup>えんざい</sup>ではなかったかと疑問の声が高い久間<sup>くま</sup>三千年さんへの執行がありました。死刑の乱発は冤罪の乱発につながります。

★

執行された河村啓三さんは、自伝を「死刑廃止のための大道寺幸子基金・表現展」に応募して、加賀乙彦さんから選考委員の高い評価を受け、作品は『こんな僕でも生きていいの』（インパクト出版会）というタイトルで出版されました。

その「はじめに」で河村さんは執筆の動機を次のように書いています。

「人を殺したあと、その死体をコンクリート詰めにしたというあの忌まわしい出来事から十七年もの歳月が過ぎてしまうと、事件そのものが風化してしまい、当事者の私ですら細部の記憶が次第に薄れていっている。あれほど被害者の顔や声を鮮明に覚えていたはず

なのに、それがだんだんぼやけてくるのだ。これでは亡くなられた被害者とその遺家族に申し訳ないし、そんな浅ましい自分にも腹が立つ。」そして、「自分が生まれてから事件を起すまでの追いつめられていく自身の状況などについて、自分の心を切開しながら、犯した罪を便箋にしたため」たと。

自分の生い立ちから、犯罪、そして逮捕に至るまでを克明に記した上で、最終章ではこんな言葉がつづられています。

「人の生きる権利を無理やり奪った私に、人を責める権利はないと思う。また、逆に言えばそんな私に生きる権利があるのだろうか。これらのことを深く考えていけばいくほど早く死んでしまいたいと思う。この世から消えてしまいたいと思うも、今となっては自害することも許されなくなってしまった。」

★

自分で罪を認めているのなら「冤罪<sup>えんざい</sup>」ではないじゃないか、と思われるかもしれませんが、しかし、その罪が、その人が死刑に値するかどうかは、また別の問題です。その判断の誤りは「冤罪」に近いことではないでしょうか。権力が人の命を奪う死刑という刑罰が、どんな犯罪とも決して釣り合うようなものではないことにこそ、多くの死刑確定囚が再審請求をしている根拠があるように思います。（一）

山下法相の死刑執行に抗議する緊急集会

日時・2019年1月21日（月）18時30分

会場・岐部ホール（四谷）